

霊性進化論の歴史——批判と克服に向けて

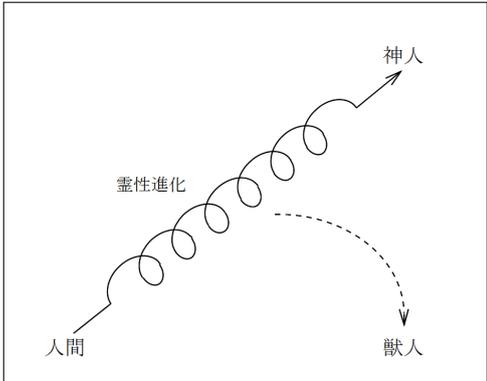
I. 霊性進化論の歴史	5
II. 「スピリチュアリティ」という幻想はなぜ消えないのか？——由来と構造	
III. 公的遺言・追悼SNSの提案	

[I. 霊性進化論の歴史]	10
-----------------	----

0. オウム真理教の最終目的——「人類の種の入替え」

「八八年がひとつの転機だったとすれば、それは麻原の考えのなかに、普通に人類を救済するのではなくて、「人類の種の入替え」を行うという考え方が出てきたからです。これは、修行をせず悪業を積む大半の普通の人たちを滅ぼしてしまい、修行をして善業を積む者たちのみの国をつくるという意味だったのです。」

(上祐史浩+大田俊寛「オウム真理教を超克する」
『a t プラス』13号、p.26)



「神仙民族」 → 神的種族 (神人・精神文明)
「三悪趣に墮ちる人々」 → 動物的種族 (獣人・物質文明) という二元論

1. ブラヴァツキー夫人の神智学



ヘレナ・ペトロブナ・ブラヴァツキーの略歴

・1831年ウクライナに生まれる。幼少時から数々の霊現象を体験。17歳でニキフォル・ブラヴァツキー将軍と結婚するも、数ヶ月で家出し、世界中を放浪する。その詳細は不明だが、エジプトで「ルクソール同胞団」という秘密結社に入会した、イギリスの高名な霊媒D・D・ホームの助手を務めた、チベットに滞在して「大師(マハトマ)」から指導を受けた、と言われる。

・1873年にアメリカに渡り、オルコット大佐に出会う。75年、共同で神智学協会を設立。77年、『ベールをとったイシス』を刊行。神智学協会を再出発させるため、79年に本部をインドに移転させる。協会の運動は、インドのナショナリズム運動と共鳴しながら発展したが、84年「マハトマ書簡」の詐術性が問題視される。ブラヴァツキーは混乱を避けてイギリスに移住、88年に第二の主著『秘密教義』を刊行。91年に死去。

思想の発展

【ヨーロッパ期】 青年時代にヨーロッパや北アフリカを遍歴する過程で、西洋オカルティズムの知識を吸収。エリファス・レヴィ(1810-75)の魔術論を始め、新プラトン主義、グノーシス主義、ユダヤ教カバラ、ドイツ神秘主義の思想を学ぶ。

【アメリカ期】アメリカに渡り、心霊主義（スピリチュアリズム）の活況を目にする。そのとき同地では、ダーウィンの『種の起源』（1859）に端を発する進化論が急速に普及し、キリスト教の創造論と対立していた。宗教と科学の相克を解決する道を模索する。

【インド期】人種・文化論としてアーリアン学説を受容（諸文明・諸宗教の起源としてのインド）。ヒンドゥー教の輪廻転生論が、神智学の基礎に据えられる。チベット奥地にある「大白色同胞団」という秘密結社の大師たちが、神智学協会の導き手に位置づけられる。 5

オカルティズム+心霊主義+進化論+アーリアン学説+輪廻転生+秘密結社 = 神智学

心霊主義と進化論の融合——アメリカ体験の重要性 10

近代の最先進国に成長しつつあったアメリカにおいて、人々の精神状況の混乱を目にする。1859年にダーウィンの『種の起源』が公刊され、進化論が急速に普及。キリスト教の創造論と対立し、キリスト教信仰が全体として弱体化する。他方、従来のキリスト教によって自分の魂は救われないと考えた人々が、心霊主義の思想に傾倒する。

→新しい科学理論としての進化論と、新しい宗教思想としての心霊主義を融合させれば、「真の知恵」に到達することができるのではないかと、肉体ではなく、霊体の進化論。 15

『秘密教義』における人種進化論

- 第一根源人種 アストラル体で「不滅の聖地」に発生。 20
- 第二根源人種 ハイパーボリア人。エーテル体で北方の島々に住む。
- 第三根源人種 レムリア人。エーテル体と肉体が結合。
- 第四根源人種 アトランティス人。高度な文明を発達させたが、大洪水で大陸が沈没。
- 第五根源人種 アーリア人。 (←今ここ)
- 第六根源人種 アメリカに発生？ 25
- 第七根源人種 ???

霊性進化論の骨格

1) 霊性進化——人間は肉体の他に「霊体」を持つ。霊体は肉体の死後も存続し、その霊性を高めることが、人間の生の目的である。 30

2) 輪廻転生——人間は霊性を進化させるために、地上界への転生を繰り返す。地上での行いは「業（カルマ）」として蓄積され、死後のあり方を決定する。

3) 誇大的偽史——霊体は永遠の存在であるため、個人の歴史は、天体や人種や文明といった長期の歴史とも相関性を持つ。これらの集合的存在もまた、歴史的な盛衰を繰り返して進化を続けている。 35

4) 人間神化／動物化——人間は霊性の向上を遂げた結果として、神に等しい存在に進化する。しかし、霊の成長を目指さず、物質的快樂に溺れる者は、動物的存在に堕ちる。

5) 霊的階層化——個々の人間は、その霊格の高さに応じて階層化されている。これまでの宗教において「神」や「天使」とされてきた存在は、すべて高位の霊である。

6) 秘密結社の支配と相克——人類全体は、「^{マスター}大師」や「指導霊」と呼ばれる高位の霊によって統括され、こうした高級霊たちは、秘密の団体を結成している。他方、その働きを妨害しようと目論む「低級霊」たちが存在し、彼らもまた秘密の団体を結成している。 40

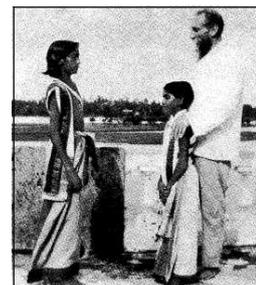
7) 霊的交信——高級霊たちは、必要に応じて、媒体となる人間にメッセージを届ける。

8) メタ宗教——世界の諸宗教のなかには、霊性進化に関する知識が隠されている。ゆえに、諸宗教からそうした真理を抽出し、総合しなければならない。 45

2. リードビーターと「東方の星教団」

チャールズ・リードビーターの略歴

・1847年イギリスに生まれる。英国国教会の聖職者の道歩むも、心霊問題への関心を捨てきれず、83年に神智学協会に入会。インドで「クート・フーミ大師」からヨガの指導を受け、チャクラの覚醒を体験したという。



5

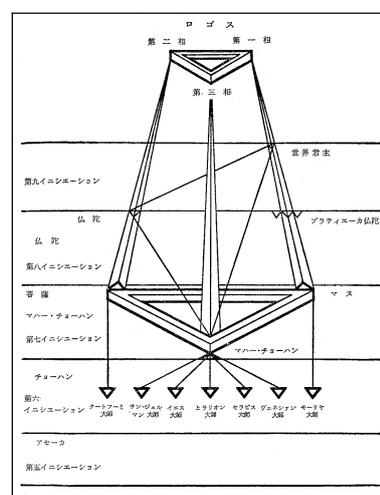
・ブラヴァツキーの死後は、女性の活動家アニー・ベサント(1847-1933)と協力して神智学協会を主導。インド人の少年クリシュナムルティ(1895-1986)を救世主に掲げ、1911年「東方の星教団」を発足させたが、クリシュナムルティの離反により1929年に解散した。1934年に死去。

『大師とその道』(1925)

・リードビーターが、チベット奥地に住む大師クート・フーミやモーリヤから指導を受け、数々の「イニシエーション」を通過することで、霊的真理や世界進化の構造に目覚めていく様子を記述したものである。

・一つの惑星の世界は、三位一体の「(太陽) ロゴス」を頂点として、九層に階層化されている。

- 第九イニシエーション・・・世界君主
- 第八イニシエーション・・・仏陀
- 第七イニシエーション・・・大首長、マヌ
- 第六イニシエーション・・・七人の大師たち



15

20

25

・高位の霊格たちは、「大白色同胞団」という秘密結社を形成し、人類の霊性進化を導いている。現在の支配種族＝第五根源人種（アーリア人）を指導しているのは、主にマヌという霊格。700年後には、カリフォルニアに第六根源人種が現れると予言される。他方、世界には「影の兄弟たち（ダーク・ブラザーフッド）」と呼ばれる悪しき勢力も存在し、人類の霊性進化を妨害している。

30

3. シュタイナーの人智学

ルドルフ・シュタイナーの略歴

・1861年、オーストリア・ハンガリー帝国（現在はクロアチア）に生まれる。青年時代は主にゲーテの研究者として活動。1902年に神智学協会に入会。ブラヴァツキーの理論を精緻に発展させ、『神秘学概論』『アカシヤ年代記より』『民族魂の使命』等の論考を発表。しかし、クリシュナムルティをメシアに掲げようとする神智学協会の動きに反発し、12年に独立、人智学協会を発足する。その後、40年自由ヴァルドルフ学校やゲーテアヌムの設立など多面的に活動。25年に死去。



35

キリストとアーリマンの対立

・惑星、人種、民族は、さまざまな指導霊に促されながら進化の道歩んでいるが、それを妨害する悪しき力が存在する。その代表は「ルシファー（キリスト教の墮天使＝悪魔）」

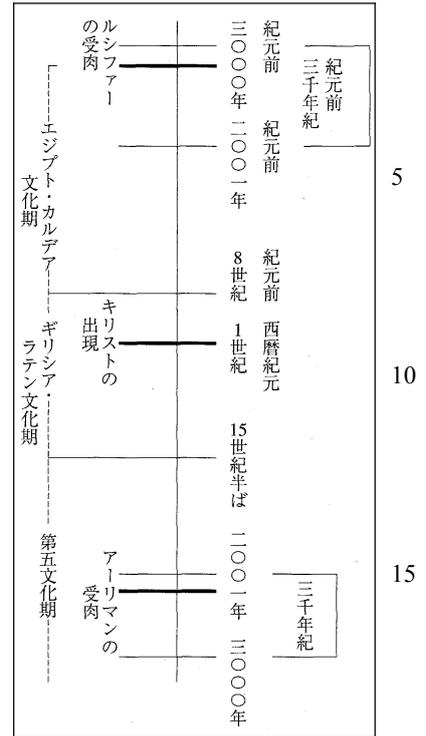
45

と「アーリマン（ゾロアスター教の悪神）」である。ルシファーは幻想的な思考を蔓延させることによって、アーリマンは唯物論的な見方を強要することによって、霊界を正しく知覚する能力を人間から奪ってしまう。

・高位の指導霊である「キリスト」がイエスとして受肉して以降、人類はその力に導かれてきた。しかし、15世紀半ばからアーリマンの勢いが強まり、世界は今や、科学的合理主義や唯物論的経済主義といった物質的価値観に染め上げられつつある。このままでは、来たる三千年紀にアーリマンが受肉し、人類の文明は荒廃の道をたどるだろう。アーリマンの奴隷となってしまうか、あるいはキリスト意識に覚醒できるかということに、人類進化の成否は委ねられている。

もし人間が、「経済的な人間と銀行家によって作り出された経済秩序に、法的国家と精神の有機体を対置させなくてはならない」ということを洞察できないならば、アーリマンはまさに、この「人々が洞察できない」という点に、みずからの受肉を——つまり確実にやってくることになる、みずからの受肉の勝利を——ふさわしい方法で準備するための重要な手段を見出すことでしょうか。アーリマンはある種の人間を用いて、このような手段を行使することができます。

(シュタイナー『悪の秘儀 アーリマンとルシファー』p.124)



4. ランツのアリオゾフィ

アドルフ・ヨーゼフ・ランツの略歴

・1874年オーストリアのウィーンに生まれ、19歳でシトー派の修道院に入る。院内で発掘された墓石の彫刻に靈感を受け、善の原理たる貴人（高等人種）と悪の原理たる獣（劣等人種）の闘争が歴史の真相であるという考えを抱くようになる。修道院を離れ、アーリア人種至上主義のオカルト雑誌『オースタラ』の刊行を開始。1904年に『神聖動物学』を公刊。54年に死去。



・ブラヴァツキーの神智学に影響され、自らの教説を「アリオゾフィ（アーリアの叡智）」と名づける。ブラヴァツキーによれば、第三根源人種のレムリア人の段階において、人間と動物に初めて性の分化が起こったが、その際に一部の人間が動物と交合し、獣的存在に墮落していった。ランツはこの説に依拠しつつ、獣的な下等人種を粛清し、アーリア人の純粋性を高めて「神人」に進化させるべきであると説いた。

アドルフ・ヒトラーの「神々と獣たち」

天地創造は終わっていない。少なくとも人間という生物に関するかぎり終わっていない。人間は超克されねばならぬものである。人間が神になる。人間は生成途上の神である。人間は自己の限界を乗り越えるべく、永遠に努力しなければならない。立ちどまり閉じこもれば、衰退して、人間の限界下に落ちてしまう。半獣となる。神々と獣たち。世界の前途は今日、そのようなものとしてわれわれの行く手にあるのだ。

(ラウシュニング『永遠なるヒトラー』p.296-7) 45

5. ケイシーのアトランティス論

エドガー・ケイシーの略歴

・1877年、アメリカ・ケンタッキー州に生まれる。聖書を耽読する少年時代を過ごし、成人後は、書店員・保険セールス等の職を転々とする。あるとき失声症を患い、催眠治療を受けたところ、普段のケイシーとは別の人格が現れ、自身の病の治療法について語り出した。こうしてケイシーは催眠状態において、病気の治療法のみならず、さまざまな人間の前世や、真理とは何か、宗教とは何かといった深遠な問題について語るようになっていった。



5

10

・ケイシーによれば、催眠状態において「アカシック・レコード」という宇宙的な記録の集合体にアクセスし、その記録を読むこと（リーディング）によってさまざまな質問に答えているという。ケイシーは生涯にわたって多くの人々からの質問に答え続け、リーディングの記録は約14000件に及んだ。1945年に死去。

15

アトランティスの滅亡

・ケイシーによれば、人類はおよそ一千万年前、霊体という形態で地球に出現した。人類が肉体をまとい、生物としての発展を遂げたのは、太古のアトランティス大陸においてであった。人類はその地で高度な科学技術を獲得し、繁栄を謳歌した。

20

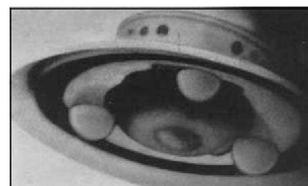
・しかし次第に、自己中心的な物欲を満たすために科学を用いる人間たちが増加し、彼らの姿は動物に変容していった。そして人間は、高い霊性を保つ「神的種族」と、動物的欲望に駆られた「悪魔的種族」に分かれ、争い始めた。彼らの闘争によってアトランティスは幾度も破局を迎え、三度目の破局の際に大陸が沈没した。その後、アトランティス人たちは世界中に離散し、各地で古代文明を築いた。アトランティス人の霊体の多くは、現代

25

6. アダムスキーのUFO論

ジョージ・アダムスキーの略歴

・1891年、ポーランドに生まれる。幼少期にアメリカに移住。青年期にはアメリカ陸軍に勤務し、その後、さまざまな職を転々とする。40代を迎える頃にカリフォルニア州に移住し、「宇宙哲学」に関する講演を開始。「ロイヤル・オーダー・オブ・チベット」という名称の団体を結成する。



30

35

・1952年にアダムスキーは、空飛ぶ円盤に遭遇したと称し始める。翌年その体験を『空飛ぶ円盤実見記』として発表。それによれば、パロマー天文台付近の砂漠で「オーソン」という名の金星人に出会い、彼の手引きで宇宙船に搭乗、「スペース・ブラザーズ」や「マスター」に出会ったという。宇宙人のメッセージを数々の書物で語り伝え、1965年に死去。

40

スペース・ブラザーズの教え

・アダムスキーによれば、金星の他、木星や土星といった太陽系の惑星にも人間が生存し、地球より進化した文明を築いている。彼らは高度な科学技術によって宇宙に進出し、「スペース・ブラザーズ」という団体を結成しており、卓越した賢者の「マスター」がそれを率いている。

45

・宇宙人は太古から地球に飛来し、「神」や「天使」として人類の進化を援助してきた。地球人は彼らの支援を受け、レムリアやアトランティスに高度な文明を築いたが、しかしそれらは「悪魔」の妨害によって崩壊してしまった。現在の地球人は、原子力開発の成功により、再び文明存亡の縁に立っている。人間のなかでエゴや敵対心が増大し、戦争に踏み切ることになれば、現文明もまた崩壊してしまうだろう。友愛の心によって争いを避け、科学技術を宇宙進出のために用いなければならない。



5
10

7. アイクの爬虫類人陰謀論

デーヴィッド・アイクの略歴

・1952年イギリスに生まれる。若い頃はサッカー選手として活躍。引退後、BBCのスポーツ・キャスターを務める一方、エコロジー運動に関心を持ち、みどりの党に入党。その頃、ある霊媒師の治療を受け、精神の決定的な覚醒を体験する。世界は国際金融勢力によって密かに支配されているという着想に到達し、『シオンの賢者の議定書』の重要性を認めたことにより、社会から激しい批判を受け、緑の党を除名される。

・その後アイクは陰謀論を発展させ、世界を密かに支配しているのは、「ユダヤ」ではなく「爬虫類人（レプティリアン）」という宇宙人であるという見解を示す。爬虫類人陰謀論の書籍として、『大なる秘密』（1999）、『竜であり蛇であるわれらが神々』（2001）等を次々に発表。現在に至る。

爬虫類人による人類の家畜化

・地球には数十万年前から、すでにさまざまな宇宙人がやって来ている。それらは大別して、「金髪碧眼」の白色人種、爬虫類型異星人（レプティリアン）、グレイの三種類である。レムリアやアトランティスといった太古の文明は、これらの宇宙人によって作られた。



25
30

・宇宙人のなかでもレプティリアンは、科学力と物質欲が発達した種族である。彼らは紀元前5000年頃にシュメール文明を創造した際、白色人種と交合し、人類の支配種族である「アーリア人」を作り出した。レプティリアンは、アーリア人の意識を操作することによって、あるいは自らアーリア人に変身することによって、その他の人類を家畜として支配している。レプティリアンの支配から逃れるためには、人類の体内に隠されたチャクラを開き、霊的覚醒を遂げなければならない。



35
40

『ザ・リバティ』（幸福の科学出版）2010年4月号より

45

[Ⅱ. 「スピリチュアリティ」という幻想はなぜ消えないのか？——由来と構造]

1. 近代社会の特殊性——公共的な死生観の喪失

宗教の四段階構造論

5

・宗教の基本構造を、「虚構の人格」を中心に掲げ、そこから発せられる「法」を紐帯として、「共同体」を結成すること」と規定した上で、その形態の変遷を図式化。

時代	原始	古代	中世	近代
信仰形態	祖霊崇拜	多神教	一神教	主権制
主要共同体	家族・氏族	民族	王権と教権	立憲国家
支配原理	血縁	武力	福祉・普遍倫理	法・抑制均衡
職能の分化				
<p>○宗教 法=言語の領域</p>				
<p>○呪術 魂=心身の領域</p>				

10

15

20

近代以前の典型的な死生観

1) 原始社会——「祖霊」としての死

祖先の霊魂を中心として、家族的な共同体を結成。人は死後、自らもまた祖霊の一つとなり、郷土に留まって子孫たちの生活を見守る。

25

2) 古代社会——「戦士」としての死

農業が発展して人口が増加し、国家が形成される。土地と労働者をめぐる戦争が頻発し、戦う階級（戦士）、戦勝を祈る階級（祭司）が成立。死を恐れないことが名誉とされる。

3) 中世社会——「道徳的審判」としての死

いくつかの古代国家が帝国に成長する一方、人間の弱さに着目した倫理的思索が発展。すべての人間を超越した一なる神が、死後、普遍的倫理観に基づいて審判を下す。

30

近代において公共的死生観が失われた原因

ア) 政教分離原則の確立（国家）

中世末期に起こった宗教戦争の結果、「この世」と「あの世」の領域を厳密に区別することに。前者は立憲主義に基づく主権国家が統治し、後者は個々人の心情に委ねられた。

35

イ) 資本主義のもたらす物質的豊かさ（株式会社）

株式会社という共同体により、グローバルな経済圏の形成、絶えざる新製品開発が実現。飢餓や疫病の減少により、死は常に切迫感を伴うような問題ではなくなった。

ウ) 科学的・実証的・批判的精神の発達（大学）

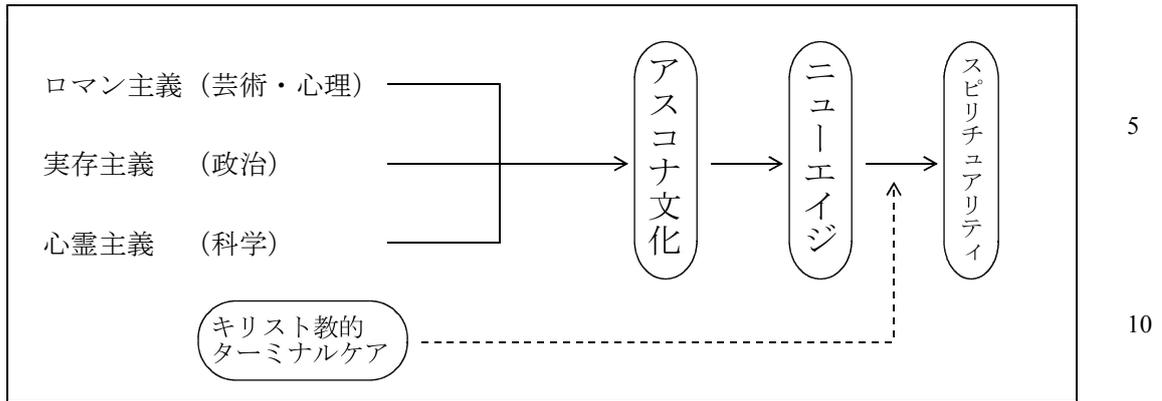
40

12世紀以降、教会や修道院の付属学校が独立性を高め、大学が成立。キリスト教を含め、従来の宗教が説いてきた世界観・歴史観・死生観に対する批判的研究が蓄積される。

→全体として、物質的領域を緻密に分析・管理しうるような体制が急速に発展した。

45

2. 19～20世紀にかけての「スピリチュアリティ」の展開



1 9世紀における三つの源流——死を捉えようとする近代の思潮

1) ロマン主義

人間の「理性の光」によって世界を照らし出そうとする啓蒙主義への対抗運動。光の届かない「闇の世界」の探求。個人的な心情や想像力の重視。情熱的かつ絶望的な恋愛や、甘美な自殺への志向性。 15

- ・墓場派(Graveyard School)……ロマン主義の先駆の位置を占める、18世紀イギリスの詩人グループ。夜、死、墓場、憂鬱といった主題を選好した。
- ・サナトリウム文学……結核患者に見られる身体的特徴(青白い表情、痩せた体、落ち窪んだ瞳)が、ロマン主義の傾向と合致。生命の儚さや繊細さを描写。
- ・ヒステリーと女性……不合理的かつ無意識的な情動に衝き動かされる女性たち。

→明瞭なもの、言語的なもの、制度的なものを浅薄と見なして軽んじる、蒙昧主義的態度。 25

2) 実存主義

キリスト教や形而上学に反発し、「本質存在 *essentia*」を否定して「現実存在 *existentia*」を強調。世界や人生の意味はあらかじめ与えられておらず、死は不気味な深淵として人間を待ち構える(絶望、ニヒリズム、被投性)。この状況に対して実存主義は、人間の存在論 30 的な「転回」を要請し、決断主義的投企(*project*)によって自ら意味を創造するべきと主張。

→人間の主体性を剥奪し、「家畜」として支配しようとする勢力の存在を説く陰謀論。

3) 心霊主義(スピリチュアリズム) 35

フォックス姉妹による霊との交信(1848年の「ハイズヴィル事件」)を切っ掛けに、欧米で爆発的に流行。降霊会が頻繁に開催されるようになる。科学者たちは1882年に設立された「心霊研究協会」を中心に、霊の世界の存在を検証しようとした。

- ・メスメリズム……ドイツの医師メスメルが、「動物磁気」の操作による治療(催眠術)を提唱。アメリカでは「ニューソート(新思考)」と呼ばれる宗教運動に結びついた。
- ・神智学……スピリチュアリズムと進化論の融合を企図。
- ・超心理学……アメリカの心理学者ラインが、ESPや念力を実証的に研究。

→物質的領域と精神的領域を不用意に混同する、疑似科学の繁茂。 45

アスコナ文化

・1920年代、スイスのマジョーレ湖畔の町アスコナに、カール・グレーサー、アンリ・エダンコヴァンらが菜食主義のコロニーを建設。オットー・グロース、クロポトキン、レーニン、シュテファン・ゲオルゲ、ヘルマン・ヘッセ、ルドルフ・シュタイナー、パウル・クレーなど、反体制・反近代主義のスタンスを取るさまざまな思想家や芸術家が集まるようになる。活動内容は多岐にわたるが、自然療法、精神療法、エコロジー、アナーキズム、ダダイズム、モダンダンス、フェミニズム、神秘主義などを基調とした。 5

・1933年、ドイツの宗教哲学者ルドルフ・オットーの主導により、世界のスピリチュアリストたちの交流場として、アスコナに「エラノス会議」が設立される。毎年8日間の大会 10
が開催され、寝食を共にしながら濃密な議論が交わされた。主な参加者は、カール・グスタフ・ユング、エーリッヒ・ノイマン、ミルチア・エリアーデ、ジョーゼフ・キャンベル、マルティン・ブーバー、井筒俊彦、河合隼雄など。

ニューエイジ

・1960年代以降、対抗文化の中心がアメリカ西海岸に移る。現代を魚座から水瓶座への移行期と捉え、「ニューエイジ」の到来によって霊的革命が起こると説いた。ドラッグやコンピューターの文化とも融合。70年代以降は日本にも伝播し、「精神世界」と称される。 15

・1965年、精神科医のエリザベス・キューブラー・ロスが、チャプレン（病院付き牧師） 20
と協力しながら、終末期の患者に対するインタビューを開始する。「死とその過程」というセミナーの内容をまとめた書物『死ぬ瞬間』（1969）が世界的ベストセラーに。人間の肉体的存続（延命）のみを目的とする近代医療への異議申し立て。

スピリチュアリティ

・対抗文化の世界的な退潮、「カルト」問題の頻発などを契機に、ニューエイジ運動は下火に。とはいえ、その後も薄く広く大衆社会に浸透してゆき、「スピリチュアリティ」と称されるようになる。 25

・1998年、WHOの健康定義に「スピリチュアリティ」を加えることが提案されるが、概 30
念を厳密に定義できず、断念される。その後もさまざまな研究者が概念規定を試みるも、共通理解を得られず。

3. スピリチュアリティの問題点

ロマン主義、実存主義、心霊主義の問題点がそのまま残存

・スピリチュアリティは幻想的な思想領域であり、反省の契機が十分に働かないため、本質的にはその内容が進歩・発展するということがない。ゆえに、源流をなす諸思想の問題点が今も残存している。すなわち、知性や言語化を軽視する蒙昧主義、陰謀論的発想に依拠した危うい政治関与、疑似科学的な代替医療・潜在能力開発、などである。 40

自己中心性（エゴイズム・ナルシシズム）の肥大化

・ロマン主義、実存主義、心霊主義は共通して、「本当の自分」の発見を目標に掲げる。そのため、スピリチュアリティの思想に慣れ親しむにつれ、エゴイズムやナルシシズムが知らず知らずのうちに肥大化し、他者に対して無根拠な優越感を抱くようになることが多い。 45

→しかし、近代社会が「死を扱う公共的な方法を喪失している」という問題を抱えている限り、スピリチュアリティにまつわる多様な幻想は、絶えることなく湧き上がり続ける。

[Ⅲ. 公的遺言・追悼SNSの提案]

5

1. 死の問題をどう取り扱うか——スピリチュアリティからの転換

「あの世」について問題にしない

・スピリチュアリズムの死生観のみならず、キリスト教、イスラム教、仏教のそれも含め、「あの世」に関する観念を現代社会において公的に共有するのは、もはや不可能ではないか。不確かな「あの世」を問題にするのではなく、むしろ、自分が死去した後も確実に存続してゆく「この世」がどうなるかを問題にすべき。

「本当の自分」を求めない

・スピリチュアリティは人生の目的を、「本当の自分」の発見や「自己の霊性」の向上に置くが、それは結果的には、エゴイズムやナルシズムを肥大化させると同時に、虚偽的な倫理観（カントのいう「仮言命法」）をも生み出してしまふ。こうした思考法を脱却し、自己の有限性（死による個体としての消滅）を認めた上で、自分の死後も生き続ける他者たちに対し、何を残すことができるかを考えるべき。

20

開かれた言語化の要請

・言語化しえない個人的な感情は、所詮は一過性のものにすぎない。自らの人生の体験を可能な限り明瞭かつ簡潔に言語化し、後世の人々にオープンに伝えるべき。

2. 公的遺言・追悼SNSの構想

25

公的な遺言

・家族や知人に対する私的遺言ではなく、社会全般に向けた公的遺言をSNSで公表する。自分の人生はどのようなものであったかを整理、紹介。履歴・写真・音声等の掲載。

30

・あらかじめ質問集を用意し、インタビュー形式で回答してもらふ。「人生のなかで、もっとも嬉しかったこと、悲しかったことは何ですか?」「成功したこと、失敗したことは?」「あなたが行ってきたことで、これからも後を継いでほしいことは?」「今後の社会において改善すべき事柄には、どのようなものがあると考えますか?」など。

35

公的な追悼

・故人の遺言に応える形で、残された人々が追悼文を寄せる。故人の人柄を偲ぶための思い出など。また、書き手が責任を負う形で、故人の人生に対する批判や論評も行うべきか。

SNSの仕組み

40

・生前に実名で登録し、公的遺言を記入。同時に、SNSに登録している他の知人とのあいだに、自分との関係性（母親、次男、大学の友人、仕事仲間等）を設定する。

・登録者が死去した場合、その知人たちがSNSに連絡。それを受け、本人に確認メールを送付。一ヶ月程度の確認期間・猶予期間を置いた後、公的遺言を公開。

45